

## 離島児における知能的発達の特性

～離島の要因の精神発達におよぼす影響（I）～

The Feature of Intelligence Development  
of the Childs on Seperated Islands

篠 原 優

Yutaka Shinohara

あまねく知られているように、知能 (Intelligence) の意味についての統一的理解は、いまだ設定されていないといってよい。さらに知能の発達における知能年令 (MA) と、生活年令 (CA) との比に、どの程度の恒常性 (Constancy) があるかについて、多くの研究がおこなわれて来た。

小見山栄一は社会階層と知能検査の成績を検討した(3)。これは桐原葆見(2)、江川亮(1)、丸山良二(6)らの研究を発展させたものである。横山松三郎らは「知能測定法における絶対尺度の構成」をとりあげ、環境の特殊要因による歪曲を排除した測定基準の作成をこころみている(8)。苧坂良二らは、この問題をさらに発展させ、獲得的知能と生得的知能の弁別可能性について、より詳細な問題提起をおこなった(7)。

外国においても、A. Anastasi の遺伝 (Heredity) と環境 (Environment) の影響に対する新しい方法論による研究のほかに、社会的・経済的地位 (Socio economic status) と知能的発達との関係、指導 (Coaching) と練習 (Practise) の効果ないしは素質 (Natrre) と養育 (Nuture) が、知能の発達におよぼす影響などについて、多くの研究報告がおこなわれている(9)～(17)。

しかし、内外にわたる多数の人たちの研究にもかかわらず、知能の意味についてはもちろんのこと、知能の発達を助長したり、制約したりする諸要因と、その相互関係についても、あまたの問題がのこされている。個体のもつ条件や、おかれている地位によつて、知能度がどの程度に恒常 (Constant) であるかについて、いくたの疑問がよせられているわけである。

このような問題を解明するために、ひとつの有力な手がかりをあたえるものとして、離島における児童生徒の知能的発達へのアプローチがあげられる。それによって離島にはどれくらい精神薄弱児 (Feeble minded child) が発生しているか、晩生的な発達傾向があるものかなどという教育現実の問題解決にも役だつことになる。この報告では、まず屋久島と甕島に対する研究結果をとりあげた。

### (I) 屋 久 島

#### (一) 問 題

現地採用や僻地派遣で離島へつとめた多くの教師の報告で、あるいは長期にわたって、島の子どもたちと生活し、観察をつづけた教師その他の人たちから、しばしば、次のようなことを聞かさ

れる。

「本土の子どもたちにくらべると、島の子の知能は、一般的にかなり劣っている。学力をのぼすことのむずかしい最大の障壁と思われる。」「知能偏差値の平均(M)は、39ぐらいで、学級の30%をこえるものに、精神薄弱児のうたがいによせられる。知能度の分布も、おおむね異常である」

ところで、そのような話をきき、報告書をよむたびに、「はたして島の子の知能度が、そのように劣るのであろうか。知能偏差値の平均が39とすれば、離島の児童生徒では、40%ちかくのものに、精神薄弱のうたがいによせられることになる。特殊学級をいくらつくっても、追いつかないということになるが」と考え、語って来た。

附属小学校の研究公開に参加した離島の女教師が、卒直な印象として、「附小の子どもと離島の子どもには、かくだんの差異がある。私たちのところでは、正規の学習内容を対象とすれば、30%ぐらいの上位群にだけ可能となる。約30%の下位群は、手ごたえなしといえる子どもである」と語っていた。附小児童の知能偏差値平均は、60をこえており、45を下まわるものはまれである。離島児の平均が39とすれば、この教師の告白が、いちおう肯定されることになる。

しかし、島の子どもの知能がひくいと語る言葉には、学力との連想がはたらいているのではないと思われる。離島の全般的な様相からいえば、本土、とくに都市部のものとくらべる時、生活経験が貧弱である、学習環境にめぐまれない、父母の教養や理解がおとる、社会的な圧力がひくいで安易にながれやすいなどという多くの要因が、学習のさまたげになるというわけである。Under achiever のいることはよく理解していても、いわゆる学力がのびなやめば、意識的、無意識的に知能度のひくさによると認知しがちである。教職の専門家でない父母たちでは、学力と知能の混同は、さけがたいことであろう。

全国都道府県のうち、本県はとくに多くの離島をかかえている。屋久島、種子島、奄美大島、徳之島などでの集会で、多くの父母や教師から、「島の子どもは知能がひくい」とか、「知能テストの妥当性や信頼性が問題だ」と語られたり、「教育委員会の計画で、しっかりした知能測定の結果をえたい」などとも訴えられている。黒島、竹島、硫黄島などのより小さい離島では、さらにつよい問題意識の対象になるものと思われる。

おおまかにいえば、知能度の平均がひくいということは、精神薄弱児の出現率がたかいということになる。すくなくとも、その候補者が多いのでないかという疑問がよせられる。このような父母や教師の問題意識を背景として、次のような諸角度から、離島の要因が精神発達、とくに知能のそれにおよぼす影響の解明をこころみたい。

(1) 離島児童生徒の知能度について、その発達の推移をあきらかにし、晩生の傾向をたしかめる。離島の小・中学校を訪問して、運動場や教室での子どもたちをながめると、その体位では、晩生傾向らしきものがうかがえる。知能にもおなじ傾向があるとすれば、「島の子は知能がひくい」という声は、小学校低学年児童につよくあてはまるわけである。

(2) 父母の職業ないしは居住条件による差異をあきらかにする。祖父母のころから島で生活しているもの、終戦後に外地からの引揚げや入植で居住しているもの、公務員・会社員などのように、転勤のため、一時的に居住しているものという三群の差異をたしかめたい。一時的な居住者の子どもには、精神薄弱児の出現率がひくいと思われる。

(3) 島内での地域・学校・性による差異を検討するとともに、知能度分布の様相を分析する。屋久島の子どもは知能がひくいといわれるが、地域や学校によるちがいや、性による差異を検討する。あわせて、分布の異常、つまり下位にかたむきつつ、二つの山があるということもたしかめたい。

## (二) 方 法

以上のような諸問題をあきらかにするために、まず、屋久島の児童生徒を対象として、次のような方法で、研究を実施した。

### (1) 対 象

島内の四地域から、小・中学校それぞれ4校、計8校を抽出し、小2、小5、中2の児童生徒に

Table 1 調 査 の 対 象

人数 地区	小 2			小 5			中 2			総 計		
	M	f	計	M	f	計	M	f	計	M	f	計
一 湊	21	15	36	20	19	39	21	22	43	62	56	118
宮 浦	15	15	30	19	19	38	25	20	45	59	54	113
安 房	10	8	18	9	19	28	37	47	84	56	74	130
神 山	21	14	35	—	—	—	—	—	—	21	14	35
総 計	67	52	119	48	57	105	83	89	172	198	198	396

ついて、学級ごとに実施した。これをまとめると、Table 1 のとおりである。これらのうち、神山地区の小5と中2だけは、交通事情や時間的制約のため、実施を延期した。

### (2) 期 日

学校ならびに教育委員会と連絡

し、次の日程でおこなった。

昭和40年10月11日	一湊小・中学校
昭和40年10月12日	宮浦小・中学校
昭和40年10月13日	竜天小学校・安房中学校
昭和40年10月14日	神山小学校

### (3) 用 具

それぞれの知能検査間に相関 (Correlation) がたかいものとして、各学年の児童生徒に、次のような検査をおこなった。

小 2	小学校低学年用田中 B 式知能検査第 1 形式 (C <sub>1</sub> )
小 5	新制田中 B 式知能検査第 1 形式 (B <sub>1</sub> )
中 2	新制田中 B 式知能検査第 2 形式 (B <sub>2</sub> )

### (4) 実 施

児童生徒との親和感をたかめつつ、担任教師の援助をえて、すべて私が実施した。小学校は午前

中学校は午後におこなった。実施条件は、各学級ともよく守れたので、条件の斉一化に問題はなかったと考えている。

### (5) 処 理

採点および分析も、すべて私がおこなった。さらに、その結果を、各小・中学校や、教育委員会へも送付した。

### (三) 結 果

このような方法で実施した結果をまとめると、次のとおりである。

#### (1) 屋久島児童生徒の知能度には、晩生傾向がうかがえる。

Table 2 屋久島児童生徒の知能分布

学 年 知 能		理論比	小 2		小 5		中 2	
			N	%	N	%	N	%
最劣	24以下	1	10	8.4	10	9.6	4	2.4
劣	25~34	6	19	16.0	13	12.4	11	6.4
中下	35~44	24	42	35.3	27	25.7	49	28.5
中	45~54	38	37	31.1	31	29.5	80	46.6
中上	55~64	24	10	8.4	20	19.1	26	15.2
優	65~74	6			4	3.8	2	1.2
最優	75以上	1						
備 考			N =119 M =41.1 S D =10.6		N =105 M =43.8 S D =13.0		N =172 M =46.4 S D = 9.5	

Table 2, 3 および Figure 1 に

よれば、小2の知能偏差値の平均は41.1であるが、中2では、46.4となっている ( $P < 0.01$ )。小2と中2のSDは、おおむね正常である。小5のそれは、ややたかくなっている。

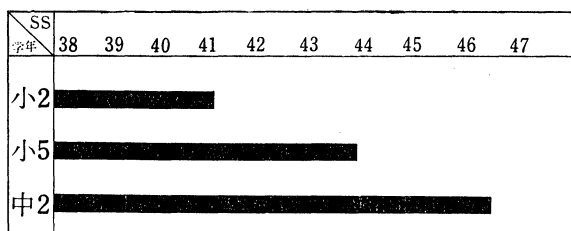
晩生の傾向があれば、学年によって、精神薄弱児候補者の出現率に差異があることになる。つまり、概括

Table 3 知能偏差値の学年別、性別比較

学 年	小 2			小 5			中 2			備 考
	M	f	計	M	f	計	M	f	計	
N	67	52	119	48	57	105	83	89	172	小2:小5 t=1.66
M	40.3	42.4	41.1	45.5	42.4	43.8	45.4	47.4	46.4	小5:中2 t=1.77
S D	10.9	10.3	10.6	12.7	13.7	13.0	9.0	9.9	9.5	小2:中2 t=4.17 p<0.01

的にいえば、小学校低学年では、精神薄弱児かと思われる児童でも、学年がすすむにつれて、境界線級児 (Boarder line child) ないしは普通児と考えるべき子ども

Figure 1 知能偏差値の学年別比較



もがいるわけである。そのような子どもたちは、環境性精神薄弱児・離島性精神薄弱児などと名づけられるものであり、仮性精神薄弱児の一種であるといってよい。

もちろん、精神遅滞の程度によって、すべてが仮性というわけではない。離島の場合、本土

にくらべて、精神薄弱児の出現率はたかいと思われる。しかし、小学校児童、とくに低学年のそれ

のうち、遅滞の軽度なものであれば、晩生の傾向があることを考慮すべきである。

(2) 屋久島の児童生徒には、精神薄弱児のたかい出現率がみとめられる。

いうまでもなく、団体式の知能検査による測定は、おおまかな「ふるい」であり、精神薄弱らしい児童生徒が発見されるだけである。このような前提に立って考えても、Table 5 から 16 にしめされているように、いちじるしくたかい。ただ、多くの父母や教師たちによって語られる出現率ほどではないことがうかがえる。常識には、あやまりがふくまれている一例である。

Table 4 知能度の学校別比較 (小2)

学校 知能	一 湊 (2 のい)	宮之浦 (2 のい)	竜 天	神 山 (2 のい)
N	36	30	18	35
M	43.2	39.9	41.9	39.6
S D	9.4	12.2	7.5	10.1
I S が34以下 のもの	4(11.1%)	9(30 %)	5(27.8%)	11(31.4%)
I Q が75以下 のもの	3( 8.3%)	4(13.3%)	1( 5.6%)	5(14.3%)

Table 5 知能度の学校別比較 (小5)

学校 知能	一 湊 (5 のい)	竜 天	宮之浦 (5 のろ)
N	39	28	38
M	42.9	40.6	47.3
S D	11.3	12.4	14.5
I S が34以下 のもの	9(23.1%)	7(25.0%)	5(13.2%)
I Q が75以下 のもの	7(17.9%)	6(21.4%)	5(13.2%)

Table 6 知能度の学校別比較 (中2)

学校 知能	一 湊 (A)	宮之浦 (B)	安 房 (A)	安 房 (B)
N	43	45	41	43
M	46.8	45.2	46.9	47.5
S D	9.6	8.4	10.4	10.4
I S が34以下 のもの	6(14.8%)	2( 4.4%)	5(12.2%)	2( 4.7%)
I Q が75以下 のもの	5(11.6%)	2( 4.4%)	5(12.2%)	2( 4.7%)

全国平均にくらべると、かなりたかくても、学年による差異がいちじるしく、年令の推移とともに漸減する、地域や学校によって、大きくちがっているといつてよい。地域や学校による差異のうまれる条件のひとつとして、Table 16 にあるとおり、家庭の職業における差異があげられる。

小学校児童、なかんずく、低学年のそれ

に、異常に多くあらわれる 発生因として、生活経験の乏しさ、人口の島外転出、養育条件の貧困さ、社会的圧力 (Social pressure) のひくさ、教育的・文化的刺戟の不足などと、多くのものが仮説的にあげられる。それらのことが、全般的に知能度を低下させ、晩生傾向とあいまって、出現率をたかくしているものと思われる。

離島のもつ経済的、文化的、教育的諸条件が改善されたなら、大巾な出現率の低下がみられ、本土のそれに近づくにちがいない。ことに、小学校低学年児童では、晩生の傾向からしても、幼児教育の改善がおこなわれることで、かなりの変化がみられることになる。正常な発達型が多くなり、本土の児童生徒との一致度がたかくなるわけである。

Table 7 小2 知能偏差値分布表

学校 知能	一湊	宮之浦	竜天	神山	計	
					N	%
10~14		2			2	1.7
15~19		1		1	2	1.7
20~24	2	1		3	6	5.0
25~29	1		1	2	4	3.4
30~34	1	5	4	5	15	12.6
35~39	8	3	3	6	20	16.8
40~44	8	5	4	5	22	18.5
45~49	8	7	2	7	24	20.2
50~54	2	3	3	5	13	10.9
55~59	5	3		1	9	7.6
60~64	1				1	0.8
計	36	30	18	35	119	100
備考	N=119 M=41.1 S D=10.6					

Table 8 小2男 知能偏差値分布表

学校 知能	一湊	宮之浦	竜天	神山	計	
					N	%
10~14		2			2	3.0
15~19		1		1	2	3.0
20~24	1			2	3	4.5
25~29			1		1	1.5
30~34		2	2	4	8	11.9
35~39	7	1	1	5	14	20.9
40~44	5	3	1	3	12	17.9
45~49	5	4	2	4	15	22.4
50~54	1	1	2	2	6	8.7
55~59	2	1			3	4.5
60~64						
65~69						
70~74				1	1	1.5
計	21	15	10	21	67	100
備考	N=67 M=40.3 S D=10.9					

Table 9 小2女 知能偏差値分布表

学校 知能	一湊	宮之浦	竜天	神山	計	
					N	%
20~24	1	1		1	3	5.9
25~29	1			2	3	5.9
30~34	1	3	2	1	7	13.7
35~39	1	2	2	1	6	11.8
40~44	3	2	3	2	10	18.8
45~49	3	3		3	8	15.7
50~54	1	2	1	3	7	13.7
55~59	3	2		1	6	11.8
60~64	1				1	1.9
計	15	15	8	14	52	100
備考	N=52 M=42.4 S D=10.3					

Table 10 小5 知能偏差値分布表

学校 知能	一湊	宮之浦	竜天	天	計	
					N	%
10~14		1			1	1.0
15~19		3	1		4	3.8
20~24	1	1	3		5	4.8
25~29	6		2		8	7.6
30~34	3		2		5	4.8
35~39	6	3	3		12	11.4
40~44	5	6	4		15	14.3
45~49	8	4	7		19	18.1
50~54	3	7	2		12	11.4
55~59	4	7	4		15	14.3
60~64	2	3			5	4.8
65~69	1	1			2	1.9
70~74		2			2	1.9
計	39	38	28		105	100
備考	N=105 M=43.8 S D=13.0					

Table 11 小5男 知能偏差値分布表

学校 知能	一湊	宮之浦	竜天	天	計	
					N	%
15~19		1	1		2	4.2
20~24	1				1	2.1
25~29	3				3	5.4
30~34	1				1	2.1
35~39	5		2		7	14.6
40~44	2	3	2		7	14.6
45~49	3	2	2		7	14.6
50~54	1	5			6	12.5
55~59	3	5	2		10	20.8
60~64	1	2			3	5.4
65~69		1			1	2.1
計	20	19	9		48	100
備考	N=48 M=45.5 S D=12.7					

Table 12 小5女 知能偏差値分布表

学校 知能	一湊	宮之浦	竜天	天	計	
					N	%
10~14		1			1	1.8
15~19		2			2	3.5
20~24		1	3		4	7.0
25~29	3		2		5	8.8
30~34	2		2		4	7.0
35~39	1	3	1		5	8.8
40~44	3	3	2		8	14.0
45~49	5	2	5		12	21.0
50~54	2	2	2		6	10.5
55~59	1	2	2		5	8.8
60~64	1	1			2	3.5
65~69	1				1	1.8
70~74		2			2	3.5
計	19	19	19		57	100
備考	N=57 M=42.4 S D=13.7					

Table 13 中2知能偏差値分布表

学校 知能	一湊	宮之浦	安房(A)	安房(B)	計	
					N	%
5~9				1	1	0.6
10~14						
15~19		1			1	0.6
20~24			2		2	1.2
25~29	2	1	1		4	2.3
30~34	4		2	1	7	4.1
35~39	3	10	5	4	22	12.8
40~44	5	8	5	9	27	15.7
45~49	15	10	7	8	40	23.3
50~54	4	10	12	14	40	23.3
55~59	4	4	3	4	15	8.9
60~64	6	1	3	1	11	6.4
65~69			1	1	2	1.2
計	43	45	41	43	172	100
備考	N=172		M=46.4		SD=9.5	

Table 14 中2男知能偏差値分布表

学校 知能	一湊	宮之浦	安房(A)	安房(B)	計	
					N	%
15~19		1			1	1.2
20~24			1		1	1.2
25~29	1	1			2	2.4
30~34	3		1	1	5	6.1
35~39	2	4	2	2	10	12.0
40~44	2	6	3	3	14	16.9
45~49	8	7	4	6	25	30.1
50~54	1	4	6	3	14	16.9
55~59	1	2	1	3	7	8.4
60~64	3				3	3.6
65~69			1		1	1.2
計	21	25	19	18	83	100
備考	N=83		M=45.4		SD=9.0	

Table 15 中2女知能偏差値分布表

学校 知能	一湊	宮之浦	安房(A)	安房(B)	計	
					N	%
5~9				1	1	1.1
10~14						
15~19						
20~24			1		1	1.1
25~29	1		1		2	2.2
30~34	1		1		2	2.2
35~39	1	6	3	2	12	13.5
40~44	3	2	2	6	13	14.6
45~49	7	3	3	2	15	16.9
50~54	3	6	6	11	26	29.3
55~59	3	2	2	1	8	9.0
60~64	3	1	3	1	8	9.0
65~69				1	1	1.1
計	22	20	22	25	89	100
備考	N=89		M=47.4		SD=9.9	

Table 16 調査対象の職業分類

職業	地区			
	一湊地区	宮之浦地区	安房地区	神山区
工員 労務 大工 船員 など	37%	23	7	3
商業, 加工工業	13	9	6	4
運送業				
農業	14	13	59	67
漁業	18	5	1	0
林業	3	7	3	0
公務員, 会社員 など	16	40	20	26
無職	0	3	4	0%

(3) 屋久島児童生徒における精神薄弱児の出現率には、家庭の職業による差異がいちじるしい。

屋久島に居住した期間の長短で、児童生徒の父母たちは、次のような類型にわけられる。

(イ) 祖父母のころ、または、それ以前から、居住しているもの。

(ロ) 終戦後になって、開拓民としての入植、外地からの引揚などの諸事情で、居住しはじめたもの。

(ハ) 公務員や会社員として派遣され、一時的に居住しているもの。

(イ)および(ロ)の類型に属する人たちは、おおむね、農業・漁業・林業をいとなんでいる。いうまで

Table 17 知能度の職業別比較

職業	学年 知能	小 2	小 5	中 2
農業	N	40	22	62
	%	33.6	21.0	35.5
	M	37.6	40.2	44.2
	S.D	12.2	10.5	10.3
公務・会社	N	24	31	49
	%	20.1	29.5	28.5
	M	45.5	49.1	47.8
	S.D	8.6	10.6	9.2
総対象数		119	105	172

Table 18 職業別、学年別の知能度分布

学年 職業 知能	小 2		小 5		中 2	
	農	公務・会社	農	公務・会社	農	公務・会社
5~9					1	
10~14	1					
15~19	2		1			
20~24	4		1	1	1	1
25~29	3		3		3	
30~34	5	2	1	2	2	1
35~39	6	4	2	3	10	6
40~44	8	4	4	3	13	7
45~49	5	7	8	7	12	9
50~54	4	4		4	14	13
55~59	1	2	2	6	3	5
60~64		1		4	2	6
65~69					1	1
70~74	1			1		
備考	N=40 M=37.6 S.D=12.2	N=24 M=45.5 S.D=8.6	N=22 M=40.2 S.D=10.5	N=31 M=49.1 S.D=10.6	N=62 M=44.2 S.D=10.3	N=49 M=47.8 S.D=9.2

Table 19 知能偏差34以下の出現率

職業 学年 人数	農 業		公務・会社		備考
	N	%	N	%	
小 2	15	37.5	2	8.3	農=40 公=24
小 5	6	27.3	3	9.7	農=22 公=31
中 2	7	11.4	2	4.1	農=62 公=49

Figure 3 知能偏差値34以下の職業別出現率

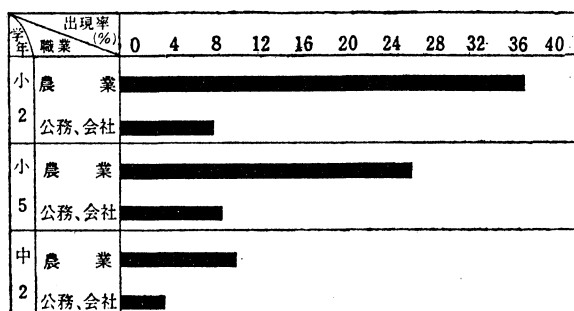
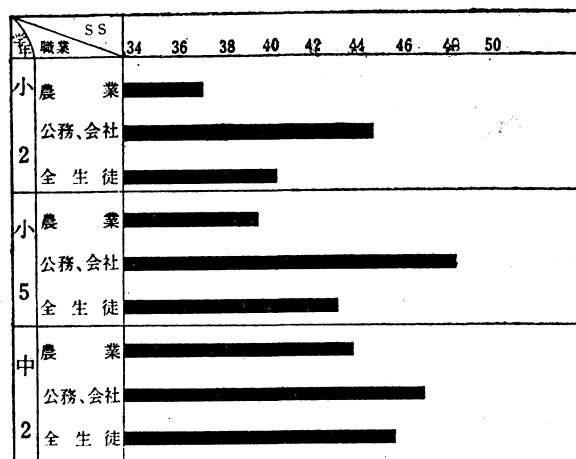


Figure 2 知能度の学年別、職業別比較



もなく、このひとびとは、島の風土的条件への適応ではすぐれているけれども、体位や体力ではおとる傾向があるという。通婚圏のせまき、ないしは近親結婚率のたかきとも関連があるものと思われる。

ところで、父母の職業のうち、比較的に多い農業の児童生徒と、公務員・会社員の職業をもつ父

母たちのそれをくらべると、Table 17 から 19, および Figure 2 と 3 のようになる。これらによ



れば、小2および小5では、農業に異常なたかさの出現率がみられている。

### (三) 要 約

「島の子どもは、一般に知能がひくい」とか、「精神薄弱児が40% ちかくあらわれる」などと語られるのをたしかめるため、この研究をとりあげた。屋久島の各地から、小・中学校それぞれ4校をえらび、小2・小5・中2を対象として、男198名、女198名に、団体式知能検査を実施した。条件統制のため、採点をふくめて、すべて私が担当した。これによって、次の諸点がうかがえた。

- (1) 屋久島児童生徒の知能的発達には、晩生傾向がある。
- (2) すべてのもの、とくに、小学校低学年児童に、精神薄弱のうたがいをもよおされるものが、異常に多くみとめられる。
- (3) 居住の期間や条件を反映した家庭の職業による落差がいちじるしいなど。

### (五) 発 展 課 題

離島児における知能的発達の特性という主題でありながら、この研究では、屋久島の児童生徒を対象として、知能的発達の側面から、ひとつの概観をこころみただけである。すなわち、その晩生傾向と、精神薄弱児候補者の出現率をたしかめただけである。この研究をすすめるために、次のような課題があげられる。

- (1) 調査の標本数や地域を多くする。
- (2) より詳細に、居住の期間や条件による差異を検討する。
- (3) 晩生傾向の発生因を分析する。
- (4) 幼児期、成人期などと巾ひろく調査する。
- (5) 精神薄弱児への診断を実施するなど。

### (七) 屋 久 島 の 印 象

屋久島は山と海、そして溪谷と森林にめぐまれた島である。さらに、親切さ、静寂さ、人情のこまやかさにあふれた島である。今回の調査でも、教育長、指導主事、校長などの皆さんから、あれこれと配慮いただいて、「サービスとはかくあるべきもの」と、つよく意識させられるとともに、私の日ごろの行動について、ふかく反省させられた。

わたくしの渡島は二回目であった。はじめは、婦人児童課の用事で、安房に宿泊した。旅館は鉄筋三階で、林芙美子さんが「浮雲」をかくために滞在した安房館である。部屋の窓から見おろすと、峨々としてそびえる連峯と、そそりたつ兩岸の緑をうつしつ、水量ゆたかな安房川が流れていた。釣橋のもとでボートをかり、ときどき「ばしゃつ」とはねる「ぼら」という魚におどろかされながら、山、川そして緑だけが視界をしめる川すじを漕ぎのぼったが、なにか恐怖を感じるまま、ひきかえしたこともなつかしく追憶する。

こんどの調査では、はじめ、宮之浦の国民宿舎に二泊した。開館したばかりで、客も多かったが、教育長さんの厚意でとめていただいた。近代ムードを味うため、島の皆さんが見物に来るというデラックスさであった。宿舎の窓ごしに、東支那海の荒波が、岩に碎け、島の緑が海にまであふれそうに思われた。野生の芙蓉が白くむらがりさくかなたに、島でただひとつの近代工場「屋久電」の煙突から流れる黒煙がみえ、うつくしい自然と、不調和だとさえ思われた。三泊目は、また安房館をおとずれた。

屋久島はほぼ円形の島である。そのためか、バスにのると、いつもおなじところを走っているようにも思われる。島の中央部はむろんのこと 海岸ちかくまで、八重岳連峯がせまっているためである。それらの山を切りさいて、あちこちで水量ゆたかな川となり、その川すそに人家がむらがっている。流れのみじかいところでは、瀬となり、滝となっていた。

行政区画では、上屋久と屋久の二町にわかれている。昨年4月1日の人口は、それぞれ12,726名と10,077名である。面積は299.3km<sup>2</sup>と239.3km<sup>2</sup>である。岩波写真文庫のうち、鹿児島県新風土記には、次のような紹介がのせられている。

「屋久島は鹿児島島の南、約135kmにある円形の島である。中央に九州最高をほこる宮之浦岳(1935m)など多くの連峯が、いわゆる八重岳を構成し、海拔1000mをこえるあたりには、屋久杉の巨木がうっそうと茂っている。この未開の自然美によって、国立公園に指定され、それに加えて、昭和27年度から、31万kwの電源開発工事がすすめられている。実現のあかつきには、九州における主要な電源地帯になるはずである」

聞くとところによれば、この電源開発は、かならずしも、当初の予定どおりではないらしい。鹿児島島から船で約5時間、飛行機で35分というように、交通の発達にともなって、屋久島の離島性は、しだいに失われてゆく。テレビの普及は、さらにそれを促進するだろう。

しかし、自然と人情にめぐまれた島、近代社会のもつ巨大なメカニズムに、ともすれば押し流れそうな人たちにとって、心のオアシスともいえる島のうるわしさを、いつまでも残してほしいとねがうのは、島をおとずれる人たちのもつ共通の念願といえるにちがいない。

## (II) 甕 島

### (一) 問 題

自然の風光にめぐまれ、人情のこまやかな島、そして海の幸にもめぐまれている甕島は、本県のもつ離島のひとつである。本土から赴任する教師や警官たちは、いわゆる僻地派遣として、その待遇にとくべつの考慮がはらわれている。

甕島へわたるには、串木野港または阿久根港から船にのる。島のうち、もっとも本土に近接した里村の港まで、約1時間50分である。屋久島への5時間に比べると、はるかに近いといってよい。しかし、島の諸港に船をつけながら、終着の手打港へつくためには、5時間をこえることにな

る。毎日1便、串木野と阿久根から、船がでるとはいいいながら、冬は東支那海の季節風になやまされ、夏から秋にかけては、台風の影響で、しばしば欠航をくりかえす。「船が小さいので」「本船から“はしけ、”でわたる港が多いから」「空港がほしい」などと、島の人たちが話していた。

この島は上甕島、平良島および下甕島と、これを取りまく大小多くの無人島からなりたっている。

Table 1 甕 島 の 人 口 (昭40.4.1)

村 名	人 口	自然増減	社会増減	備 考
里	2,815	5	△ 138	入口の増減は昭和38.10.1に対する昭和39.9.30の比較である。
上 甕	5,043	35	△ 216	
下 甕	5,718	5	△ 194	
鹿 島	2,428	△ 7	△ 87	

る。その意味で、ただ甕島とよぶよりは、甕群島とよぶことが、より正しいと思われる。口永良部島のほかに、とりまく島のない屋久島に比べると、対照的であるといつてよい。

行政的にいえば、鹿児島県薩摩郡に所属し、里村、上甕村、下甕村、鹿島村にわかれている。各村の人口は、Table 1 のとおりである。各村とも

女子は男子より、約10%多くなっている。また、社会減、つまり、父の出稼や、中卒者の島外転出がめだっている。Table 2 のように、農業または漁業に従事するもの、あるいは半農半漁、父は出稼で、母は農業の家庭が多いという。

Table 2 甕 島 の 職 業 構 成

職 業	小2	小5	中2	備 考
全 数	120	153	140	里、鹿島長浜の各校区での調査対象による。
農・漁業	66	105	97	
%	55.0	68.6	69.3	

「甕」という島名はよみにくいと、しばしば語られる。そしてまた、その名前をきくと、北国の冬空を連想しがちである。しかし、島の実態、たとえば、村民の住宅、意識や行動、さらに村民の顔かたちをとりあげても、沖縄や奄美

より本土的である。屋久島とくらべても、さらに本土にちかいといつてよい。

このような地理的、風土的な条件をもつ甕島ではあるが、やはり離島である。こんどの調査では、屋久島や本土の農村でおこなった研究結果と対比させながら、次のような諸問題についての解明をこころみた。

- (1) 甕島児童生徒の知能度における年令的变化の有無や程度をたしかめる。離島の要因による晩生傾向の有無を検討する。
- (2) 家庭の居住条件による知能度の年令的变化の差異をたしかめる。農・漁業と公務員・会社員との比較を実施する。
- (3) 精神薄弱児の候補者、つまり知能偏差値34以下のものの出現率をたしかめる。島の子どもには、精神薄弱が多いという常識的見解を検討し、あわせて、屋久島との比較をしてみたい。

## (二) 方 法

これらの諸問題を解明するために、次のような方法を取りあげた。

### (1) 対 象

甕島児童生徒のうち、Table 3 の対象を設定した。里中2年は、3組のうち、その1つについて

Table 3 調査の対象

地 域 性	学 年	小 2			小 5			中 2			総 計
		M	f	計	M	f	計	M	f	計	
鹿 島		11	20	31	19	15	34	27	24	51	116
長 浜		13	16	29	22	17	39	26	25	51	119
里		27	33	60	42	38	80	19	19	38	178
合 計		51	69	120	83	70	153	72	68	140	413

おこなったが、その他は、小2、小5、中2とも、各校の学年全員を対象とした。

#### (2) 期 日

鹿島、長浜、里の順に、昭和41年9月12日から、9月14日にかけて

ておこなった。

#### (3) 用 具

屋久島や本土農村の場合とおなじように、各学年とも、それぞれ次のような団体式知能検査をおこなった。

小2 小学校低学年用田中B式知能検査第1形式 (C<sub>1</sub>)

小5 新制田中B式知能検査第1形式 (B<sub>1</sub>)

中2 新制田中B式知能検査第2形式 (B<sub>2</sub>)

これらの検査は、相互に相関 (Correlation) がたかいものとして採用したことはいうまでもない。

なお、あらかじめ依頼して、各学級担任から、被検者の本籍、現住所、家庭環境、学業成績を個別的にかいた記録をいただいた。

#### (4) 実 施

条件統制のため、すべて私が検査した。各担任には検査の助手を依頼した。各学級とも異常なく終了した。里小学校の5年生のほかは、すべて正午までにおこなった。いずれの学校も、きわめて協力的で、感謝にたえなかった。

#### (5) 処 理

すべて私がおこなった。各学校へは、学級別、個人別の結果を送付した。さらに教委もふくめて、全般的な報告書をさしあげた。

### (三) 結 果

このような方法でおこなった研究から、次のことがうかがえた。

#### (1) 知能度平均の学年的差異

学校別、学年別に集計した結果は、Table 4 から6のとおりである。これらの表から、次のことがしめされている。

(イ) 小2と小5では、傾向として、小5がたかい。

(ロ) 小5にくらべると、傾向として中2がひくい。これは中学校生徒、とくに上位群の島外転出

と、派遣されて赴任する父母が、中学生であれば、その子を本土へとどめることにもよるものと思われる。

(イ) 屋久島の児童生徒ほどに明確な晩生傾向がみられない。

(ニ) 学校や学級による知能度平均の差異がいちじるしい。とくに、小2の鹿島と長浜、小5の鹿島と長浜をくらべると、鹿島のたかさがめだつ。小5の「里い」と「里ろ」の差もいちじるしい。

なお、学年別に男女をくらべると、Table 7 から12のとおりである。いずれも傾向として、男子がたかくなっている。

Table 4 小2児童の知能度分布

学校 知能 組	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
5～9				1	1
10～14					
15～19		1			1
20～24		1	2		3
25～29	3			2	5
30～34	2	3	3	1	9
35～39		4	4	5	13
40～44	6	5	4	3	18
45～49	7	8	5	8	28
50～54	4	4	6	8	22
55～59	5	2	5	1	13
60～64	3	1	1	1	6
65～69	1				1
N	31	29	30	30	120
M	47.5	43.2	45.0	43.7	44.9
S D	10.6	9.9	10.3	10.7	9.7

Table 5 小5児童の知能度分布

学校 知能 組	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
0～4		1			1
5～9			1		1
10～14					
15～19	1	2		1	4
20～24			3	4	7
25～29	1	1			2
30～34	4	4	2	3	13
35～39	7	5	1	3	16
40～44	2	7	6	5	20
45～49	2	5	7	9	23
50～54	4	3	6	5	18
55～59	4	4	7	5	20
60～64	7	5	5	2	19
65～69		2	2		4
70～74	2			2	4
75～79					
80～84			1		1
N	34	39	41	39	153
M	47.7	44.5	48.6	45.9	46.4
S D	13.6	14.2	14.0	12.6	13.9

Table 6 中2生徒の知能度分布

学校 知能 組	鹿島 A	鹿島 B	長浜 A	長浜 B	里 1	合 計
5～9	1	2				3
10～14						
15～19						
20～24						
25～29		1	5		1	7
30～34	1	3		5	4	13
35～39	6	3	4	1	5	19
40～44	6	2	4	6	8	26
45～49	3	4	4	3	4	18
50～54	4	6	6	4	8	28
55～59	3	3	2	2	5	15
60～64	1		1	3	2	7
65～69		2		1	1	4
N	25	26	26	25	38	140
M	43.8	43.4	43.3	46.0	46.3	44.9
S D	10.9	14.1	10.2	10.5	9.5	8.8

Table 7 小2男児童の知能度分布

学校 知能	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
25~29	1			2	3
30~34	1	2	2		5
35~39		1	3	2	6
40~44	3	3	2	2	10
45~49	3	3	3	2	11
50~54	1	2	1	3	7
55~59	1	1	2	1	5
60~64	1	1	1	1	4
合 計	11	13	14	13	51
備 考	N=51 M=45.0 S D=9.4				

Table 8 小2女児童の知能度分布

学校 知能	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
5~9				1	1
10~14					
15~19		1			1
20~24		1	2		3
25~29	2				2
30~34	1	1	1	1	4
35~39		3	1	3	7
40~44	3	2	2	1	8
45~49	4	5	2	6	17
50~54	3	2	5	5	15
55~59	4	1	3		8
60~64	2				2
65~69	1				1
合 計	20	16	16	17	69
備 考	N=69 M=44.8 S D=11.1				

Table 9 小5男生徒の知能度分布

学校 知能	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
0~4		1			1
5~9			1		1
10~14					
15~19				1	1
20~24			1	1	2
25~29		1			1
30~34	2	4		2	8
35~39	3	3		1	7
40~44	1	4	2	2	9
45~49	1	1	3	6	11
50~54	2	2	4	2	10
55~59	4	2	6	1	13
60~64	5	3	2	2	12
65~69		1	2		3
70~74	1				1
75~79				2	2
80~84					1
合 計	19	22	22	20	83
備 考	N=83 M=48.4 S D=14.6				

Table10 小5女児童の知能度分布

学校 知能	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
15~19	1	2			3
20~24			2	3	5
25~29	1				1
30~34	2		2	1	5
35~39	4	2	1	2	9
40~44	1	3	4	3	11
45~49	1	4	4	3	12
50~54	2	1	2	3	8
55~59		2	1	4	7
60~64	2	2	3		7
65~69		1			1
70~74	1				1
合 計	15	17	19	19	70
備 考	N=70 M=44.2 S D=10.9				

Table 11 中2男生徒の知能度分布

学校 知能	鹿島	鹿島	長浜	長浜	里	合 計
	A	B	A	B	／	
5～9		1				1
10～14						
15～19						
20～24						
25～29		1	3			4
30～34		3		4	1	8
35～39	2	1	2	1	3	9
40～44	4			3	3	10
45～49	3	2	2	1	1	9
50～54	3	4		1	7	15
55～59	1		2	1	1	5
60～64			4		2	6
65～69		2	1	1	1	5
合 計	13	14	14	12	19	72
備 考	N=72 M=46.1 S D=12.0					

Table 12 中2女生徒の知能度分布

学校 知能	長浜	長浜	鹿島	鹿島	里	合 計
	A	B	A	B	1	
5～9			1	1		2
10～14						
15～19						
20～24						
25～29	2				1	3
30～34		1	1		3	5
35～39	2		4	2	2	10
40～44	2	3	2	2	5	14
45～49	2	2		2	3	9
50～54	2	3	1	2	1	9
55～59	1	1	2	3	4	11
60～64	1	3	1			5
合 計	12	12	12	13	19	68
備 考	N=68 M=44.7 S D=10.6					

## (2) 家庭の職業による知能的発達の差異

農・漁業と給料生活にわけて、家庭の職業による知能度の平均をくらべると、Table13 から19, ならびに Figure 1 のとおりである。これらの表や図から、次のことがうかがえる。

- (イ) 農・漁業家庭の児童生徒にくらべると、給料生活家庭のそれは、どの学年でも、有意の差をもってたかくなっている。(p<0.01)
- (ロ) 両者とも、小5は小2よりたかい。(p<0.01) すなわち、このかぎりにおいて、知能的発達の晩生傾向があることになる。
- (ハ) 小5と中2をくらべると、両者はひとしいか、むしろ中2がひくくなっている。たとえ傾向としての差であっても、屋久島での結果とちがっている。これは上位群に属する中学生の島外転出や、赴任者が中学生を本土にとどめることによるものか、あるいは、この島が屋久島より本土的なことによるものかについて、よりたしかな分析が必要である。

Table 13 農漁業家庭児童の知能度分布 (小2)

学校 知能	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
15~19		1			1
20~24		1	2		3
25~29	3			2	5
30~34	2	2	3	1	8
35~39		3	4	4	11
40~44	3	4	1	3	11
45~49	3	2	3	4	12
50~54	1		3	5	9
55~59	2		3		5
60~64				1	1
合 計	14	13	19	20	66
備 考	N=66 M=41.2 S D=10.1				

Table 14 農漁業家庭児童の知能度分布 (小5)

学校 知能	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
0~4		1			1
5~9			1		1
10~14					
15~19		1			1
20~24			2	4	6
25~29		1			1
30~34	3	3	2	3	11
35~39	5	5	1	2	13
40~44	2	5	6	3	16
45~49	2	5	7	6	20
50~54	2		4	3	9
55~59	2	2	5	5	14
60~64	5	1	3	1	10
65~69			1		1
70~74	1				1
合 計	22	24	32	27	105
備 考	N=105 M=44.3 S D=12.6				

Table 15 農漁業家庭生徒の知能度分布 (中2)

学校 知能	鹿島 A	鹿島 B	長浜 A	長浜 B	里 1	合 計
5~9		1				1
10~14						
15~19						
20~24						
25~29			5		1	6
30~34	1	1		5	4	11
35~39	3	2	4		4	13
40~44	2	2	3	4	7	18
45~49	2	3	2	3	4	14
50~54	2	5	2	4	8	21
55~59	2		2	1	4	9
60~64				1	2	3
65~69		1				1
合 計	12	15	18	18	34	97
備 考	N=97 M=44.1 S D=10.1					

Table 16 給料家庭児童の知能度分布 (小2)

学校 知能	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
5~9				1	1
10~14					
15~19					
20~24					
25~29					
30~34					
35~39					
40~44	2	1	2		5
45~49	2	3		2	7
50~54	2	3	3	1	9
55~59	3	1	2		6
60~64	2		1		3
65~69	1				1
合 計	12	8	8	4	32
備 考	N=32 M=50.3 S D=10.1				



Table 17 給料家庭児童の知能度分布 (小5)

学校 知能	鹿島	長浜	里 い	里 ろ	合 計
15~19	1				1
20~24					
25~29	1				1
30~34					
35~39	1				1
40~44		1		1	2
45~49					
50~54	1	3	1	1	6
55~59	1	1	1		3
60~64	1	2		1	4
65~69		1	1		2
70~74	1			2	3
75~79			1		
80~84					1
合 計	7	8	4	5	24
備 考	N=24 M=56.0 S D=14.5				

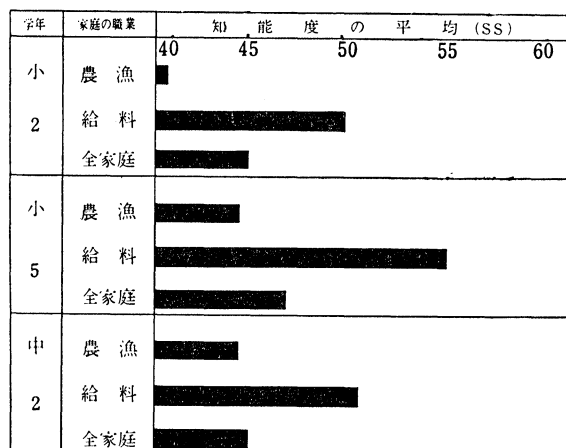
Table 18 給料家庭生徒の知能度分布 (中2)

学校 知能	鹿島 A	鹿島 B	長浜 A	長浜 B	里 1	合 計
5~9		1				1
10~14						
15~19						
20~24						
25~29						
30~34						
35~39					1	1
40~44	2					2
45~49	1		1			2
50~54	1		2			3
55~59	1	3				4
60~64	1		1	2		4
65~69		1			1	2
70~74						
合 計	6	5	4	2	2	19
備 考	N=19 M=52.0 S D=13.4					

Table 19 家庭の職業による知能発達の差異

職業	小 2			小 5			中 2			備 考
	N	M	S D	N	M	S D	N	M	S D	
農・漁業	66	41.2 <sup>※</sup>	10.1	105	44.3 <sup>※</sup>	12.6	97	44.1	10.1	t=2.15 P<0.05 t=1.62
給 料	32	50.3	10.1	24	56.0	14.5	19	52.0	13.4	
全 数	120	44.9	9.7	153	46.4	13.9	140	44.9	8.8	

Figure 1 家庭の職業による知能度の差異



## (3) 飩島児童生徒における低知能者の出現率

あまねく知られているように、団体式の知能検査は、目のあらい「ふるい」である。しかし、この検査で、いちじるしくひくい知能度のものに、精神薄弱のうたがいがよせられることはいうまでもない。

飩島の子どもたちのうち、知能偏差値 34 以下のものをまとめると、Table 20 から 21 および Figure 2 のようになる。これらから、次のことがうかがえる。

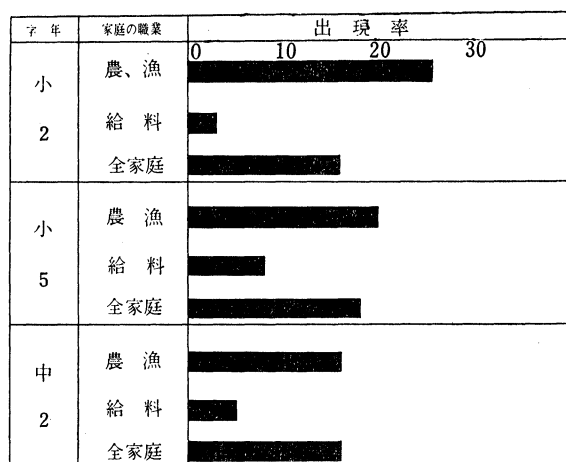
Table 20 低知能者の出現率

学年	学 校	組	全 数	低知能者	出現率
小   2	鹿 島	／	31	5	16.1%
	長 浜	／	29	5	17.3
	里	い	30	5	16.7
	里	ろ	30	4	13.3
	小 計		120	19	15.8
小   5	鹿 島	／	34	6	17.6
	長 浜	／	39	8	20.5
	里	い	41	6	14.6
	里	ろ	39	8	20.5
	小 計		153	28	18.3
中   2	鹿 島	A	25	2	8.0
	鹿 島	B	26	6	23.1
	長 浜	A	26	5	19.2
	長 浜	B	25	5	20.0
	里	1	38	5	13.2
	小 計		140	23	16.4
備 考			低知能者は S S 34 以下のものをさす。		

Table 21 低知能者の職業別比較

家庭		学年	小 2	小 5	中 2	合計
農・漁	全 数		66	105	97	268
	該当者		17	21	18	56
	出現率		25.8%	20.0	16.1	20.9
給料	全 数		35	27	19	81
	該当者		1	2	1	4
	出現率		3.1%	8.3	5.3	4.9
全家庭	全 数		120	153	140	413
	該当者		19	28	23	70
	出現率		15.8%	18.3	16.4	16.9

Figure 2 低知能者の職業別比較



- (イ) 各学年とも、約 20 % のものが該当する。ただし、小 2 の「里ろ」、中 2 の「鹿島 A」と「里 1」は、10%程度である。
- (ロ) 全般的にいえば、各学年とも、いちじるしい差異がなく、屋久島での出現率とちがっている。
- (ハ) 職業別に比べると、農・漁業家庭は、給料生活のそれにくらべて、いちじるしくたかい。これは屋久島・本土農村とも共通する現象である。

- (二) 農・漁業家庭でも、学年の推移とともに減少する。これも屋久島とおなじであるが、それほど明確でない。しかし、いずれにしても、晩生傾向の徴候と思われる。

#### (四) 要 約

離島の要因が児童生徒の知能的発達に、どんな影響をあたえるかを解明するために、小2、小5中2を対象として、甕島の三地域で、団体式知能検査をおこなった。その結果から、次の諸点がうかがえる。

- (1) 甕島は屋久島より本土的である。
- (2) 小2と小5の間では、晩生傾向がうかがえる。
- (3) 中2の生徒には、特殊な事情のため、屋久島とことなる様相がある。
- (4) 農・漁業の家庭、給料生活の家庭とも、晩生傾向がみとめられる。
- (5) 低知能者は、農・漁業の家庭に多いが、学年がすすむにつれて減少するなど。

#### (五) 発 展 課 題

これまでの研究は、屋久島、甕島ならびに本土農村について、ささやかな調査をこころみただけである。「離島児における知能的発達の特性におよぼす影響」という主題からいえば、残されている多くの問題がある。今後の研究をすすめるについて、さしあたり、次の諸点をとりあげたい。

- (1) 屋久島、甕島よりも遠くはなれた島について調査する。
- (2) 下位検査の得点について分析する。
- (3) 知覚、行動、耐性、環境、体位、体力などを対象とした研究を実施する。
- (4) 横断的だけでなく、縦断的なれそをとりあげるなど。

#### (六) 甕 島 の 印 象

「こしきじま」という名前をきくと、「妙な島名だ。ことばの起源はなんだろう。よめない人が多いのでないか」と思いがちである。そして、前近代的であったり、暗く陰気な連想もはたらくような気がしていた。

鹿児島にに住みついて14年になる私は、甕島出身の知人も多く、また、そこへ赴任した多くの教師からの報告もきいていた。しかし、他の島へは渡る機会をもちながら、甕島へのそれにめぐまれず、つい北国の冬空のようなイメージをもちつづけていた。

ところで、こんど島へ渡ってみておどろいた。そのイメージは、根本的にあやまっていたのである。もちろん、船便はすくないし、「はしけ」で上陸する港も多い。海がしければ、島への滞在を余儀なくされがちである。しかし、他の薩南諸島にくらべると、はるかに本土的な島である。多くの人の意識や行動、住居、容姿からも、そのことがうかがえる。

甕島の海岸は、東支那海の荒波のため、しばしば断崖となり、洞穴が多い。浦と浦を結すぶ船に

のりながら、緑と崖のコントラスト、突出した岬、湾入した砂浜、そして大小多くの無人島をながめると、時間の経過もうち忘れる。鹿島の教育長、校長の皆さんに案内され、西海岸の絶景をながめた時の印象は、まことに強烈で、すべての人に知らせたい、親しいものをつれて来てやりたいとつよく思ったことだった。

甌島はまた人情のこまやかな、そして海の幸にめぐまれた島である。鹿島だけでなく、長浜や里の人たちからしめされた親切をかみしめつつ、私の日常を反省したことだった。岸壁の下に、川の入口に、そして波にあらわれる岩のくぼみにも、大小の魚が泳いでいた。海へもぐれば、伊勢海老や貝も多くとれるという。

ところで、楽園のようなこの島にも、時代の波がおしよせている。若者は島外へ転出し、盆と正月にだけ、若い人たちのあふれる島になるらしい。父の出稼に依存する家庭も多いと語られていた。「耕して天にいたる」いも畑も、労力の不足から、かなり荒れている。テレビも普及した。鹿島と長浜では約3割、里では8割をこえるという。離振法による港の整備もすすんでいる。

本土的なにおいのつよい島、ソフトムードの女性の多い島、しかも、新旧の意識が濃厚に混在している島、なによりも、自然と人情のうつくしいこの島へ、また訪れる機会をもちたいと、切にねがっている。

### Ⅲ 本 土 農 村

屋久島や甌島との概括的な比較をするために、本土の農村地域のひとつとして、中福良校区をとりあげた。家庭の職業からいえば、小2、小5、中2とも、それぞれ80%をこえる農家戸数である。

Table 1 知能度の学年別分布

知 能 \ 学 年	小2	小5	中2
15~19		1	
20~24	2	1	
25~29	1	2	
30~34	4	4	3
35~39	4	1	7
40~44	2	7	7
45~49	2	4	9
50~54	5	7	4
55~59	1	3	5
60~64	2	1	
65~69		3	1
70~74			
75~79			
N	23	34	36
M	41.9※	44.9※	44.9
S D	11.6	12.6	8.3

学校は小中併設で、校長は兼務となっている。

鹿児島市から約50軒、さして高くはないけれども、山また山にかこまれた肥薩線ぞいの農村である。汽車の駅はあるけれども、地形の制約で、ホームがみじかいため、普通列車さえ、よく通過する。行政的には、本県の始良郡隼人町に所属しているが、いわゆる「やまば」あるいは「うわば」の学校である。

ところで、離島の要因は、僻地的ないし農村的な要因につながっている。離島児童に晩生傾向があり、仮性もしくは環境性の精神薄弱者が多いとすれば、農村にも類似のことがあるにちがいない。この問題を解明するために、昭和41年5月26日、屋久島、甌島とおなじ条件で、調査をおこなった。その結果のあらまきは、Table 1 から3、Figure 1 から2のとおりである。それらから、次

Table 2 知能度の学年別・性別比較

知能 性	小 2			小 5			中 2			備 考
	M	f	計	M	f	計	M	f	計	
N	15	8	23	14	20	34	20	16	36	t = 0.91
M	40.1	45.3	41.9	42.2	46.9	44.9	44.7	45.3	44.9	
S D	12.3	7.5	11.6	10.2	13.4	12.6	6.5	10.1	8.3	

の諸点がうかがえる。

(→) 小2にくらべると、小5の知能度がたかく、離島とおなじ傾向がしめされて

Tadle 3 農家と非農家の比較

知能 職業	小 2		小 5		中 2	
	農	非農	農	非農	農	非農
N	19	4	30	4	31	5
M	*** 38.7	*** 56.8	*** 43.4	*** 63.8	*** 43.4	*** 54.4
S D	9.6	3.9	10.9	4.3	7.1	8.1
全 数 との比	83	17%	88	12	86	14
備考	t = 5.73 P < 0.01		t = 6.52 P < 0.01		t = 2.59 P < 0.01	

いる。

(⇒) 小5と中2には、差がみられない。このことは、離島とはことなる要因によるものか、中2になれば高校進学にそなえるため、転校させることによるものかについて、今後の検討がのぞまれる。

(⇒) 農家と非農家をくらべると、農家の子どものひくきがめだっている。標本はすくないが、非農家の子どもたちの知能度は、鹿

児島市の中心部よりたかくなっている。

(四) 農家、とくにその低学年児童に、低知能児が多い。

(五) 本校区独自の現象として、男子より女子の知能がたかい傾向がしめされている。とくに、小学校では有意差がうかがえる。

Figure 1 知能度の職業別比較

学年	職業	SS				
		30	40	50	60	70
小 2	農					
	非農					
小 5	農					
	非農					
中 2	農					
	非農					

Figure 2 知能度の性別比較

学年	性	SS		
		35	40	45
小 2	M			
	f			
小 5	M			
	f			
中 2	M			
	f			

#### IV 研究の展望

晴れた日に、鏡のような海を船でゆくのは、たのしいものである。おのずからにして、浩然の気がやしなわれる。しかし、船のゆれがひどければ、はやく港へつくようと、心から願わずにはおられない。

いくたびか島へ渡る時、荒天の船旅を経験した。船酔いのすくない私ではあるが、多くの船客が「しゅん」となってしまったり、病人のようにみえる事態をながめると、これが離島へわたるといふことの現実だと、しみじみ思わせられたことだった。

「本土の人たちがうらやましい。こんな苦労はないだろう」とか「島の人たちは気の毒だ。こんな必死の気持をたびたび味って」と考える。でも、やっとの思いで島へ渡ったら、美しい自然の風光、こまやかな人情のあたたかさ、のんびりした生活のリズムを味って、人間らしさをとりもどした気持ちになり、「できれば、島でくらしたい。浦島太郎の気持もよくわかる」などと思うことである。

鹿児島は、全国でもまれな離島の多い県である。ところで、島と本土との歴史的な関係や、地理的、経済的な制約から、両者の人間関係に、不自然なものがながれている。「あの奥さんは島ですよ」とか、「島津はまだ搾取をつづけている」などと語られる。いわれのない劣等感や優越感、ひいては不必要な対立や抗争にも発展する。

教育の現場でも、「離島には、すばらしく頭のさえた子が多い」といわれたり、「離島児の半数は、精神薄弱か、それに近い子どもでもある」とも語られる。あるいは「島の子は純情だ」といわれ「島の子はいじけている」とも聞かされる。

もちろん、島にはそれぞれ個性がある。全般的な表現があてはまりにくいことは、いうまでもない。このささやかな研究が、島の真実をより明らかにし、島の子のしあわせと、よりよい教育にすこしでも役だてばと念じている。

このような展望を背景にもちながら、より多くの島を対象として、精神発達の各側面に、離島的要因のおよぼす影響をたしかめたい。

## 主 要 文 献

- (1) 江川 亮・児童と青年の都市及び農村における知的差異について 1956 教育心理学 4
- (2) 桐原 稔見・社会的生活条件と知能の発達。1924 労働科学研究 1
- (3) 小見山 栄一・社会階層と知能検査成績 1961 日本心理学会発表論文集
- (4) 篠原 優・薩南諸島における精神薄弱者の出現率について 1965.11 九州・中・四国心理学会紀要
- (5) 篠原 優・離島的要因の精神発達におよぼす影響(Ⅱ) 1966.10 日本心理学会発表論文集
- (6) 丸山 良二・親の職業と其の子の知能 1927 教育心理研究 2 102~109
- (7) 苧坂 良二外 獲得的知能と生得的知能の弁別の可能性について 1961 京大 N X 知能検査報告(3) 日本教育心理学会紀要
- (8) 横山 松三郎外・田中 ビネー・鈴木 ビネー 知能測定法における絶対尺度の構成 1952 教育心理の諸問題
- (9) Anastasi, Anne; Heredity, environment and question "How?" psychol. Rev, 1958, 65, 197-208.
- (10) Bayley, Nancy; Factors influencing the Growth of intelligence in young children. 39th Yearb. Part 11, 1940, NSSE.
- (11) Eells, K. W; Social-status factors in intelligence test items. Unpublished PhD dissertation, 1948 Univ. of Chicago.
- (12) Flemming, C. M; Socio-economic level and test performance. Brit. J. educ. Psychol, 1943,

13, 74-82.

- (13) Haggard, E. A; Social status and intelligence: An experimental study of certain cultural determinants of measured intelligence. Genet. Psychol Monogr. 1954, 49, 141-186.
- (14) Husen, T; The influence of schooling upon IQ. Theoria 1951, 17, 61-88.
- (15) Loevinger, Jane; Intelligence as related to socio-economic factors. 39th Yearb. Part 1, 1940, NSSE.
- (16) Stone, D. R; Certain verbal factors in the intelligence test performance of high and low status groups. Unpublished PhD dissertation. 1946, Univ. of Chicago.
- (17) Yates, A; Symposium on the effects of coaching and practice in intelligence tests; An analysis of some recent investigation. Brit. J. educ. Psychol. 23, 1953, 147-154.